

式 辞

本日、公立大学法人山陽小野田市立山口東京理科大学へ入学された学部新入生の皆さん、おめでとうございいます。そして大学院研究科へ進学された皆さん、おめでとうございいます。山口東京理科大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

また、今日まで、すべての面で支えてこられました御父母の皆様及び関係者の皆様に、心からお祝いのご挨拶を申し上げます。

さらに、本日ご多忙の中、ご列席を賜りましたご来賓の皆様にも、本学を代表致しまして篤く御礼申し上げます。

本学は四月一日より公立大学法人下の大学として新たな一歩を踏み出すことになりました。本日は入学式に先立ちまして、衆議院議員河村建夫様、山口県知事村岡嗣政様より、ご祝辞を賜り、開学式を滞りなく行わせていただきましたことは本学関係者にとり、まことに光栄の至りであります。本学は、二万人を超える学生を擁するとともに、創立以来百三十五年の歴史を誇る国内でも有数の理工系大学、東京理科大学に起源を發しますとは申せ、全学千人

に満たない地方の小さな大学であります。一昨年までは、近年の十八歳人口減少、理工学離れによる志願者減に対し、危機感を募らせ、教職員一同、改善に取り組み、地道な対応成果が出つつありました。その矢先の一昨年十二月二十六日、山陽小野田市と学校法人東京理科大学とで、山陽小野田市が新たに創設する公立大学法人の設置に関し、基本協定を締結いたしました。この時から、状況は大きく変化しました。昨年の入試では定員二百人に対し実に千五百人近い人数が志願いたしましたして三百六十人余りを入学者といたしました。この結果、年間通じて、定員を安定して上回る在学生数を保っております。

また、昨年十二月二十五日にいよいよ公立大学化が山口県知事より認可されますと、本年の入試に関しましては、前年の三倍の四千六百人の志願者となりました。そして、今日、合格の栄冠を勝ち得た二百二十一人の皆様に入學式に臨んでいただいております。大学院に関しましても修士課程十五人の定員に対しまして昨年を上回る応募をいただき、今日ここに十八人の入学者の皆様を迎えております。

この事實は、まぎれもなく、地方でもしつかりした理工系の学問を学び、身に着け、やがて、産業界や社会の様々

な分野において、自身の夢を実現しようという希望に燃えた若者が山口を中心に、中国、九州、四国地方にも大勢いるということではないでしょうか。思いはかりますに、地方にあって理工系に進みたいのですが、私大となると学費がかさみ、学力に自信があっても都会に出て学ぶには生活費がかかりすぎる、今の世の中において、そう感じる方々が地方には大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。昨春の本学入学者のアンケート調査でも明確にその事実が現れております。公立化後の学費低下が本学選定の大きな動機となっております。これまでも経済的理由で学業を途中で断念せざるを得ない学生をみるたび、私自身、心が痛み、悔しい思いをしたことが幾度となくありました。

本学の周辺、駅や空港など公共の場に、未来にはばたこうとする高校生の後ろ姿と共に「公立化は私にとってうれしい」というキャッチコピーが書かれたポスターが貼られ、皆様も目にされたことがあるのではないかと思います。これは、まさに大学で教育を行う側の実感でもあります。公立化がひとりでも多くの才能ある若い人材の未来を支えてあげることができたらと心から願います。

さて本学は、先ほども申し上げましたが百三十五年前、

「理学の普及をもつて国運発展の基礎とする」を建学の精神として一八八一年に設立されました、東京理科大学の前身、東京物理講習所に起源を發します。

その精神を受け継ぎ、一九八七年に本学の前身であります東京理科大学山口短期大学が開設され、一九九五年に四年制大学へと転換、山口東京理科大学として現在に至っております。この間、確かな基礎技術力を身に着けた、地域産業界で活躍する人材を育てることを目標に努めてまいりました。本年で二十一年になります。四年制大学となりました。からの卒業生は二千人に及び、地元産業界を中心に活躍しております。そもそも東京理科大学の教育の真髄は工学や科学技術の現場でしっかり活躍できるだけの力を会得したもののだけが卒業できる「実力主義」にあります。これこそが、理科大を卒業した技術者や理系人材が社会の様々な場所で高い評価を頂いているゆえんでございます。本学も、理科大のこの崇高な方針を継承して今後も社会の諸課題の解決に向け、十分な実力を有する人材を育ていくことに変わりはありません。

さらに、公立化が成った今、一層の公正・公平性と透明性の大学運営を心掛け、本学に期待される地元、山陽小野

田市や山口県の地方創生を推進すべく、いっそうの、地域に根ざした大学づくりを行っていかねばならないと決意しております。

さて、こうした時代や社会の変化と共に歩み、変遷してまいります本学でございますが、あらためまして、これから新たな修学や探究の道を志す皆さんに、大学として普遍であるべき一対の心得を申し上げたいと思います。

まず、最初に申し上げるべきは、『大学はそれ自体が目的ではなく、将来の目標を達成するための手段であり、通過点である』ということであります。

ハレの入学式の間ですが、皆さんの中には念願かなって本学に入学したという人もあれば、所期の道には進めずにこの学校に来たという人もいると思います。努力を重ねてせっかく大学に入ったにも関わらず、気持ちの整理ができていない学生の皆さんに、私は問います。「あなたの本当の人生の目標、目的は何ですか」と。将来の夢、ありたい姿、希望、それを生きる目的とし、学ぶことの目標として心の中に宿すべきです。そして、そこに到達する為の努力、

方策、生業、勉強、それらは目的を達成するための手段なのです。

すなわち、入学した大学も将来、就職する会社なども皆さんの将来の夢をかなえるための手段に過ぎません。目的と手段の取り違えがよくあります。第一志望の大学に入れなかったからと悔やむ必要はありません。希望した学校や会社に入れなかったからと、絶望的になるのは、手段を目的と見誤っているのです。

希望通りの大学に入学した皆さんも決して驕ることなかれ、大学や大学院は単なる手段であり、通過点に過ぎません。崇高な目標がもっと先にあるものです。

さあ、大学生になった皆さんは、自分の将来の夢を、成し遂げたいことを、人生で何が重要であるかということを見つけてください。目的が明確なほど学習に身が入ります。まだ漠然としか将来を見ていない人は一、二年生のうちに思慮を深め、目標を明確にすべきです。目標を持てばどのような困難も乗り越えようとする勇気が出るからです。

こう考えますと、目標を実現するために入学したこの大学こそが、皆さんにとって最高の自分を磨く場になるはずであります。

ヴァイオリンの世界でストラディバリウスという名器があります。ヴァイオリンの奏者でしたら、いつかはそれを所有し、奏でることを望む対象の一つです。このストラディバリウスの所有者の一人であります、世界的に有名な老ヴァイオリニストは、あるときこう言っております。「私はこのストラディにとって、ひとりの旅人でしかない」「このヴァイオリンに巡り合い、ふさわしい奏者となるべく腕を磨き、そして私の夢がかなった。このあと、私は去り、名器は、次の時代に生きる、音楽に情熱を燃やすヴァイオリニストに引き継がれていくであろう」「私はただの旅人でしかない」

大学という場所も実は、代々の演奏家に伝わる楽器と同じであると思います。そこで学び成長して巣立っていく学生という演奏家を見送るとまた次の引手である学生が現れます。大学という楽器も、できれば皆さんがあこがれ、代々、人から人へと伝えられるストラディバリウスのような名器でありたいと願います。この山口東京理科大学にとって、入学された皆さんは一人の旅人です。この学び舎にとどまる間に自らの夢を実現するための力を磨くべく、切磋琢磨してください。皆さんの希望をかなえるべく、私達

教職員もこの大学を素晴らしい名器に仕立てるよう、日々努力することを誓います。

さて、手段である大学での学び方ですが、実は、されど大学なのです。ここで何を学ぶのかが大切なのです。

大学という最高学府に通う日々は、心身共に解放された、気力あふれ、人生で一番自由な時期となるでしょう。このような大学で学べる機会を得られたということは、皆様は大変恵まれているということなのです。

十八歳人口の半数が大学への進学を選んでいる日本の社会でも、多くの人達がいろいろな事情で大学進学を断念している現実があります。

先月の日本経済新聞に連載された私の履歴書欄で、アイリスオーヤマの大山社長の半生を知りました。大山さんは十分な学力と高い意欲から大学進学を夢見ていましたが、御父君の急逝のあと、八人兄弟の長男として十九歳で家業を引き継ぎ、家族を養い、下の兄弟たちに大学の高等教育を身に着けさせたのです。大山さんご自身は大学へは進めませんでした。家族を守り、会社を大きくする中で様々なことを学んだのだと思います。大山さんの大学はご自身

の仕事の中にあっただと私は思います。

世界に目を向ければ、七十数億の人類のごくわずかな人しか大学で学ぶ機会を与えられていないのです。その機会を得た皆さんが自身の将来のために大学生活を役立たせないでどうしますか。

話を主題に戻したいと思いますが、与えられた大学生活という素晴らしい日々の中で、皆さんは何を学ぶかが大切です。

本日、申し上げたいもう一つの話は、こうした選ばれた皆さんに与えられた貴重な時間に、『自ら学ぶことを身につけなさい』ということです。何かを学ぶことも大事ですが、『学ぶすべを身に付けてほしい、学び方を学んでほしい』と思います。

私はよく学生の皆さんに、デンマークの哲学者キルケゴールの、老人と渡り鳥の話をしします。皆さんの中にはご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、大切な内容を含んでおりますので、本日もこの機会にお話ししたいと思えます。この有名な話については、私は若い頃、組織革新研

究会というところの指導者である藤田英夫さんという方から一週間ずつ二度の合宿体験を経て、この意味するところを学び、以来、教育の支えとしてきたものです。

北欧の湖に、毎年、季節になると野鴨たちが渡ってきました。近くに住む老人がはるばる渡ってきた鴨をいたわって、毎日餌を与えるようになりました。野鴨は餌がいつもあり、親切な老人のいるこの湖がすっかり気に入りました。

そもそも野生の渡り鳥は同じ場所には住み着かないものです。ある季節が過ぎると次の土地に向けて遠くに飛び立つ習性をもっています。ところが、この湖の野鴨たちはいつも餌が与えられ、何一つ不自由しないこの土地から飛んでいく必要はないように思うようになりました。そして、野鴨たちはこの湖に住み着くようになりました。

野鴨たちはいつしか苦勞した長旅の記憶を忘れていききました。そんな時、いつも餌を運んでくれ、彼らを、こよなく愛してくれた親切な老人が亡くなりました。その日から野鴨たちは食べる餌に困るようになりました。餌に困って他の土地に飛び立とうとするのですが、どうしたことか飛び立つことができなくなっていました。気が付くと、知らないうちに肥ってしまい、かつて遠くまで飛べたはずの

力が全く失われていました。やがて湖に嵐がやってきて周りの山々から激流が流れ込んできました。そして、その激流に押し流されて肥った鴨たちは死んでしまいました。

この逸話の教訓の一つの見方は、容易に餌を与えられるよりも、餌自体を採る方法を身に着けることのほうがはるかに重要だということです。皆さんは、いずれは大学や大学院を卒業して社会に出ていくでしょう。大学や大学院で学ぶ期間の十倍もの時間、この先、社会で仕事をするためには、新しい知識を学び続けなければならないでしょう。大学で身に着けた知識は時間とともに陳腐化し、また、様々な仕事には固有の技術や知識を身に着ける必要があります。すぐ役立つものはすぐに役立たなくなるものです。大学時代に学ぶべきことは、すべての基礎となる知識と学び続けるための学ぶ方法です。

ぜひ、学ぶ力を身に着けてください。人生は学ぶことの連続です。人類が今日の文明を築き上げることができたのは、たゆまぬ研鑽の日々の積み重ねの歴史の結果に他なりません。人はひとりひとり、生きていく場所で一生、いろいろな形で学ぶことを続けなければ進歩はないのです。

私が本日ここに申し上げた一対のことは、「大学はそれ自体が目的ではなく、将来の目標を達成するための手段であるということと、そこで学ぶべきは生涯にわたり学び続けるためのすべを身につけること」ということであります。

どうか、本日ここに希望をもって入学された皆さんにおかれましては、健康に留意され、今の初々しい気持ちを忘れずに、しっかりした目標を形成し、それを目指して存分に学び、有意義な学生生活を過ごされまことを願って、式辞といたします。

平成二十八年四月六日

公立大学法人 山陽小野田市立 山口東京理科大学長

森 田 廣